〔書評〕「八月十五日の神話」に対する韓国社会の理解をめぐって

―佐藤卓己『八月十五日の神話：終戦記念日のメディア学』増補版刊行に寄せて―

趙相宇

一　はじめに

八月一五日は、日本における「終戦記念日」であると同時に、韓国における「植民地解放記念日」でもある。そのため、佐藤卓己『八月十五日の神話』（ちくま新書、二〇〇五年）は、日本のみならず（二〇一四年に筑摩書房から増補版が出版された）、韓国社会においても需要のある研究であり、二〇〇七年八月に韓国語訳も出版された。日本と韓国の間には依然として植民地支配の歴史をめぐり葛藤があるが、そうした状況を反映するかのように、本書の韓国語訳出版に際して韓国新聞の多くは、この著作についての紹介や書評記事を掲載した。

『朝鮮日報』[1]、『東亜日報』[2]、『中央日報』[3]を始め、『ハンギョレ』[4]、『国民日報』[5]、『文化日報』[6]、『釜山日報』[7]など、多くの新聞社が『八月十五日の神話』という日本発の研究書に関心を寄せ、書評を行った。たいていの場合、「玉音写真の捏造疑惑」、政府やマスコミによる「言論操作」と「世論操作」、「日帝の欺瞞」という要素に着目し、著者を「良識的な日本人」とする評価が多かった。大きな権力に操作された日本国民という側面に注目が集まっているのである。その評価が正しいかどうかはさておき、本稿では、なぜそのような理解がなされるのかを考えてみたい。細かい分析は後に行うとして、早速内容に入ってみよう。

二　『増補　八月十五日の神話』の構成

本論に入る前、まず、本書の構成を紹介する。

序章　メディアが創った「終戦」の記憶
第一章　降伏記念日から終戦記念日へ：「断絶」を演出する新聞報道
第二章　玉音放送の古層：戦前と戦後をつなぐお盆ラジオ
第三章　自明な記憶から曖昧な歴史へ：歴史教科書のメディア学
終わりにかえて　戦後世代の「終戦記念日」を！
補論一　「八月十五日」の民意
補論二　「八・一五革命」再考
補論三　「九月ジャーナリズム」を提唱する

本稿では、各章について内容をまとめ、韓国新聞の書評が果たして的を射たものかどうかを確認したい。そのうえで、そうした書評を間違いだと切り捨てるのではなく、なぜ、そのような理解がなされるのか、本書の内容とも絡めながら考察したい。本来なら、補論の内容もまとめるべきだが、韓国語版では補論が扱われていないため、本稿では触れないこととする。

三　「メディアが創った「終戦」の記憶」について

佐藤は、これまでの「玉音放送」研究に触れ、その多くが「内容」に力点がおかれてきたと指摘する。佐藤によれば、当時の「玉音」は雑音がひどく、受信状況が良好な場合でも、独特な抑揚で読み上げられた漢語の多い文章を正確には理解できなかっただろうという。つまり、「玉音放送」を考察する場合、「内容」がどうであったかではなく、どのように聞かれ、語られてきたかという「形式」に着目する必要があると論じ、メディア史から分析する意義を主張しているのである。では、「玉音放送」はどのような「形式」で聞かれ、語られてきたのだろうか。著者はまず、「玉音放送」を聞いて泣き崩れる「玉音写真」に着目する。

「玉音写真」は、現在でも、「八月十五日終戦記念日」

に各マス・メディア媒体で目にすることができる。その多くは、「玉音」をとおして戦況を理解した国民が、戦争の敗北に涙するというものだが、本当に彼らは「玉音」の前で泣き崩れたのだろうか。著者は否と答える。その根拠として、例えば著者は、『北海道新聞』における一九九五年一〇月八日特集で、「ラジオの前に泣き伏す小国民」と題した「玉音写真」が実は作為であったことが明らかになった事件などをあげている。この事件に関して著者が注目しているのは、当時、取材を行って記事を書いた張本人でも、本来その取材と関連がなかった「玉音写真」によって記憶が再構築される過程である。取材先の民家で「玉音」を聞いていたはずの記者が、写真との整合性を考えて学校での「玉音」体験を脳裏に描き出すのである。このような状況を受けて、著者は、我々の記憶はメディアによって再編され、やがて国民のものになっていくのだと指摘する。ここで重要なのは、メディアによって一方的に記憶が再構築されるというより、国民もまた積極的にその構築に加担していくということである。では、なぜ、日本国民は「玉音写真」という物語を欲したのだろうか。

著者は、その理由を、日本国民もまた「敗戦」を「終戦」として体験したかったからだと説明している。「負け」を彼方に追いやり、「立ち上がる」ことが目指されたのであり、そうした意味で、「戦前」と「戦後」は連続していると指摘する。つまり、高度国防体制から高度経済成長へと進んだ心性とメディアの連続性の上にこの問題を位置付けるべきだというのである。

本書は、こうした敗戦の事実をメディアの検証をとおして戦後史のなかに位置付ける作業である。

四　「降伏記念日から終戦記念日へ」について

この章では、いかにして戦前と戦後の「断絶」が形作られたかが論じられる。その「断絶」の演出において「八月十五日」が果たした役割は大きいという。

日本では一般的に戦争の終結は八月一五日とされるているが、その日は「玉音放送」があった日に過ぎない。ポツダム宣言を受諾したのは八月一四日、ミズーリ号戦

艦上で降伏文書にサインしたのは九月二日である。つまり、八月一五日は、国際的には何の意味も持たないのである。では、なぜ八月一五日が「終戦」を記念するものになったのか。

まず、八月一四日が一つの区切りになれなかったのは、まだ空爆が続いており、当時の人々にとって戦争の終わりを意味しなかった事情があるという。また九月二日は、「敗戦」を迎えた屈辱の日であり、「敗戦」を記念したくはなかった心性にもとづいていた忘却が指摘されている。ただし、戦後の占領期には、八月一五日という日への言及はあまり見られず、むしろ九月二日の「降伏」が記念されていた。八月一五日の言説が目立って行くのは、著者によれば、占領の終わりを意味していた一九五一年の「サンフランシスコ講和条約」の前後からであったという。

占領から自由になった一九五〇年代の日本は、あらゆる方面で「八月十五日の神話」の土壌を形づくっていった。政治の方面では安定的な「五五年体制」が、経済面では「もはや戦後ではない」というテーゼが、また生活面では家電に冠された「三種の神器」という言葉に象徴される復古的な神話のイメージが台頭してきた。また、歴史・記憶面においては、一九五四年の「第五福竜丸事件」を背景に、被爆体験が平和運動の国民的シンボルになっていった。こうした状況のなか、「八月十五日」が浮上し、ラジオでは「終戦特集」が大々的に組まれ、新聞では全紙面にわたり大型企画が組まれるなど、「八月ジャーナリズム」が台頭して来た。「八月十五日」における「五五年体制」の成立である。

こうした「五五年体制」を背景に、一九六二年五月一四日には「全国戦没者追悼式」が、一九八二年四月一三日には「戦没者を追悼し平和を記念する日」が制定され、「敗戦＝占領」から「終戦＝平和」への記憶の再編が「八月十五日」を中心に行われていったと著者は指摘する。ただ、こうした「八月十五日」の制度化には、一九七八年に起こった靖国神社A級戦犯合祀問題も大きな役割を果たしたという。日本国内を含め、隣国を巻き込みながら進んだこの問題は、「肯定」か「否定」か（内容）にかかわりなく、「国家アイデンティティ」へと焦点を合わせ

た（形式）というのである。つまり、「終戦記念日」を考える上では、日本国内の事情だけでなく、諸外国との国際比較を行うことも重要だと指摘するのである。例えば、中国における「終戦」は、九月三日だが、日本との歴史問題に焦点を合わせるべく、八月一五日への回帰も見られたという。国内外からの「国家アイデンティティ」をめぐる形式が、「八月十五日」への焦点化を行っている可能性の指摘は、これからの東アジアにおける歴史論争を考えるうえで重要なものであろう。

ところで、「八月十五日」は、「玉音放送」と「八月ジャーナリズム」によっていきなり浮上したのだろうか。そこで、著者は次章にかけて、「八月十五日」を前後して行われる「お盆」行事を、ラジオとの関連で検討する。

五　「玉音放送の古層」について

「玉音放送」はなぜ八月一五日に行われたのだろうか。著者は、天皇とは暦と時間を管理する存在としてあり、全国の時間を均等にするラジオは、まさに天皇制に親和的なメディアであると指摘する。つまり、「八月十五日」を形作る「玉音放送」は天皇の「日和見」と関係があり、その日付に放送を行ったのには意味があるという。そこで、その意味を探るため、著者は「お盆」に着目する。

「お盆」は、明治維新後の新政府を中心とした近代化の過程で新暦が採用されるまでは、旧暦の七月一五日に祝われていた。新暦が導入されたことで、お盆は、それまでの旧暦七月一五日と、新暦七月一五日、権力と民衆の折衷点としての中暦八月一五日に分かれていく。

「お盆」ラジオは、一九二六年新暦七月一五日に開始されるが、一九三三年以降、満州事変戦没者供養のため七月と八月の二本立てになっていった。満州事変における戦没者の出身地の多くが中暦を採用していたためであった。これを機に、一九三三年八月一五日の《盂蘭盆会法要》が放送され、一九三九年八月一五日には《戦没英霊盂蘭盆会法要》が全国中継されるようになっていった。著者は、この二つの放送を「八・一五戦没者慰霊行事」の由来として捉える。

「八月十五日」と「お盆」ラジオを考える上でもう一

つ重要なのが甲子園である。著者は、「八月十五日」の黙祷といえば、多くの人が甲子園をイメージするだろうとし、「お盆」ラジオとの関係を探る。

甲子園のラジオ放送が開始されたのは「お盆」ラジオの次の年である一九二七年八月である。甲子園における黙祷は、日中戦争勃発後の一九三八年大会から始まったものであるという。ラジオでは、「八月十五日」の朝に《盂蘭盆会法要》、夜には盆踊りを中継し、その間を媒介するメディアイベントとして甲子園を中継するようになったという。

つまり、八月一五日という日付は、「玉音放送」以前から「ハレ」編成の国民的メディアイベントであったのである。こうして、「八月十五日」は「玉音放送」に適した日付になったと、著者は指摘する。

だが、「八月十五日」を伝統的に意味付けてくれたラジオの「お盆」番組は、テレビの台頭とともに消えていき、《盂蘭盆法要》中継は、一九八九年八月一五日を最後に消える。いみじくも、この3ヶ月後、「ベルリンの壁」が崩壊し、「ヤルタ＝ポツダム体制」が終幕する。著者は、これに新たな「記憶の戦争」の始まりを見る。新聞における「八月ジャーナリズム」の成立と、ラジオにおける「八・一五放送」の系譜に連なる「八月十五日終戦記念日」の記憶は、どのように「歴史」として正典化されたのか。この問いを、著者は、歴史教科書から検討する。

六　「自明な記憶から曖昧な歴史へ」について

この章で、著者は歴史教科書から「八月十五日」を見ようと試みるが、またしてもその「内容」は問題にしない。教科書の「内容」よりも教師のパフォーマンスの方が覚えられやすいとし、教科書の「内容」に力点をおくのではなく、教科書がおかれたメディア環境全体、つまり「形式」について議論されるべきだと指摘しているのである。近年、日韓における歴史教科書問題は、その記述に過度に執着する傾向があり、今後の歴史教科書問題を考える上でもとても重要な指摘だと思われる。また、国際的に「八月十五日」を「終戦」とするのが、日本と韓国ぐらいであることを考えると、なおさら重要である。

では、歴史教科書と「八・一五神話」はどのように関係してくるのだろうか。

歴史教科書にも「五五年体制」が深く関わっている。例えば、小学校教科書では、「五五年体制」以後、「玉音放送」を重点的に記述した教科書が登場した。ここで重要なことは、「玉音」をもって「終戦」を迎える物語が「八月ジャーナリズム」とも相まったマス・メディアの企画で大量に流通し、そのなかの「玉音体験」らしい「回想録」が理念型として抽出された点にあると、著者は指摘する。つまり、教科書において「玉音」体験らしい記述があることが重要なのではなく、そのような物語が抽出される議論の枠組自体を問題にしているのである。こうした問題意識に立って著者は、中学校の教科書と高校教科書も検討していく。特に中学校教科書は「通時的学習」が重視されることから、綿密に検討している。

中学校教科書における「終戦」関連の記述は、「五五年体制」以降、「九月二日降伏」（M型）から「八月一五日関連」（C・R型）へと移行が見られる。一九六三年以降になると、高度経済成長とともに「八月十五日終戦記念日」は国民的記憶として定着し、中学校教科書にもその状況が反映される。つまり、C・R型が主流になっていったというのである。また、一九六五年の日韓基本条約、一九七二年の日中国交回復が行われると、本格的に歴史教科書記述の問題が台頭し、必然的に「八月十五日」へ重心が移っていったことも指摘されている。

こうしたなか、一九八二年に歴史教科書問題が台頭し、東アジアにおける日本軍の戦争が「侵略」か「進出」かで争われ、本当に議論されなければならなかった「終戦」の問題は流されてしまった。結局、近隣諸国ともめていくなかで、「進出」は「侵略」になったが、これに保守派が反発し、一九九六年に「新しい歴史をつくる会」が結成され、再び歴史問題が巻き起こった。「新しい歴史をつくる会」は、「語り」を重視していたが、それはある意味、実証史学と活字の権威への挑戦でもあった。これに対抗する「語り」として「慰安婦問題」「南京虐殺」という「証言」や「告発」があった。しかし、著者が重視しているのは、何もそれらの対決ではない。むしろ、著者は、それらを、対立しているというより意図せざる共同戦線と

して見る。つまり、両者とも「語り」による実証史学への挑戦であり、左右両翼から実証史学への集中砲火を行っているようなものだというのである。すなわち、歴史教科書の記述問題への焦点化は、結果として実証史学への否定を行い、左右両者とも「記憶」を曖昧なものとし、そうした「語り」が歴史教科書の記述となって曖昧な「歴史」になっていくプロセスを、著者は描いているのである。

七　「終わりにかえて」について

歴史教科書の問題で確認した左右の合作は、「八月十五日」を「戦前」と断絶させる上でも重要な役割を果たしたと著者は指摘する。例えば、丸山眞男の「八・一五革命」は、「八月十五日」を「革命」の起点と捉えることで、それまで（「戦前」）とは違った「戦後」という断絶をもたらしたという。これまで著者が論じてきたように、新聞も放送も出版も戦前からの文脈を汲んでおり、そうした断絶の意識は戦後にうまく溶け込んだ戦前をより見えなくするだろう。では、我々は「八月十五日」とどう向き合えばいいのか。その問いに対して、著者は最後に提案を行っている。その提案とはすなわち、「八月十五日＝戦没者追悼の日」と「九月二日＝反省の日」とに分けるというものである。「八月十五日」が「お盆」の系譜に連なる以上、その日に歴史教科書の問題などを論じても感情的になるだけで、冷静な議論ができない。ひとまずは戦争責任の議論と戦没者の追悼の時空を分けることで、「八月十五日の心理」を尊重しつつ、過去の戦争を冷静に分析することができるのではないかというのである。確かに、日韓関係の主な問題が植民地支配に起因する「反日感情」と無関係ではないことを考えると、そうした「感情」と「議論」を分ける提案は、日韓の関係改善のうえで有効かもしれない。では、こうした提案も含め、これまで概観してきた著者の「八月十五日」論は、韓国においてどのように受け止められているのか。

八　結論

『八月十五日の神話』は、「八月十五日」が終戦記念日となるダイナミズムを、「文化」「政治」「経済」「国際関係」「マス・メディア」というマクロな視座から論じながらも、その背景にある受け手の「心理」や「マス・メディア受容状況」、「欲望」というミクロな視座にも目を配り、双方向的な観点から「八月十五日」の形成過程を明らかにしている。マス・メディアや権力者による国民形成論や左右イデオロギー論に陥らず、淡々と「八月十五日」という複合的状況を国際関係も念頭におきながら浮かび上がらせる極めて優れた論考である。

また、すでに述べたとおり、本書は、日韓関係を考えるうえでも極めて重要な視座を提供してくれている。特に歴史教科書をめぐる論考は、「侵略」か「進出」かという記述の問題に執着すればするほど、記憶を曖昧にし、感情的で揺れ動きやすい曖昧な「歴史」を生産する逆説的状況をあらわにする。韓国における「反日」、日本における「嫌韓」問題は、ある意味「内容」に凝り固まってその「形式」を見えなくさせている状況と決して無関係ではないだろう。そのため、「戦没者追悼」と「戦争責任の冷静な考察」を行う日を分けるという提案は大変魅力的である。

しかし、こうした著者の提案は、韓国新聞各社の韓国語版『八月十五日の神話』書評および紹介文からは見当たらなかった。それどころか、本稿の冒頭で述べたように「言論操作」や「世論操作」を暴いた「良識的な日本人」による力作という読み方をされている。もちろん、こうした意見は必ずしも否定的なものではない。「言論操作」や「世論操作」という「形式」で語ることは、「操っている権力＝悪」「操られている国民＝犠牲者」という「断絶」を設定することで、日本に対する嫌悪・不満の感情を「日本政府」や「マス・メディア」に限定させる側面もあるからである。韓国にとって日本は歴史的に忌み嫌う対象であると同時に、同盟国として親密な関係を維持しなければならない現実政治の対象でもあることを考えれば、あながち間違った読み方でもないと言える。だが、そうすると、著者の最後の提案はなおさら魅力的に映るはずだが、なぜ詳しく取り上げられないのか。

理由の一つとしては、韓国における「終戦」も一九四

九年五月の国務会議にて「独立記念日」に制定されて以来、ずっと「八月十五日」であることがあげられる[8]。日本が先なのか、韓国が先なのかはわからないが、その日は韓国における「植民地解放」を祝う「感激」の日になっており、日本における「戦没者慰霊の日」とはそもそも相容れない関係にある。しかも、韓国は歴史的に「戦勝国」でも「敗戦国」でもないため、「九月二日＝反省の日」のような代替日を「八月十五日」から分離することもできない。日本と韓国における「八月十五日」を冷静に議論するためには、まず韓国における「八月十五日」を詳細に分析する必要があるだろう。

また、本書は、「八月十五日」をマクロな分析とミクロな「感情」「欲望」「語り」の双方向から捉えてはいるが、やはり、「八月ジャーナリズム」や「お盆」番組と「天皇」というテーマにより力点があるように見える。記念日をつくり、司るのは、確かに「権力」を持つ側だが、必ずしも「政府」や「マス・メディア」「天皇」を意味するものではないはずだ。「受け手」からの「権力」も重要な論点であり、その循環によって集合的記憶は構築されるはずである。著者も、こうした「受け手」の「権力」に自覚的ではある。例えば、八月一四日や九月二日が「終戦記念日」とならなかった理由として、「受け手」である国民が「敗戦」ではなく、「終戦」として記憶したかった側面が語られている。

しかし、韓国の新聞において「言論操作」や「世論操作」という一方的な「断絶」として読まれていることから、その考察はいささか足りなかったのではないかと思われる。先ほど述べたように「断絶」として捉えることが必ずしも否定的なものではないが、著者が主張するように「連続」として捉えて始めて建設的な議論が可能になるだろう。「操っている権力＝悪」「操られている国民＝犠牲者」というもう一つの「断絶」をしっかり「受け手」を意識させることによって双方向的な「連続」として結びつけるような作業が必要かもしれない。つまり、「国家的な記念日」という、どうしても操ろうとする者と操られてしまった者という「対立＝断絶」を浮かべやすい対象を、いかにして「双方向的なもの＝連続」としてしっかり浮かび上がらせるかが問われるべきだろう。

その際、その双方向性を「共犯関係」として捉えるのではなく、イデオロギーから脱した「共存関係」として捉える必要があると考える。そのためには日本における「八月十五日」研究だけでなく、韓国における「八月十五日」研究も同レベルで進めていく必要があろう。

いずれにしても、佐藤卓己著『八月十五日の神話』はそうした研究への確かな方向性を示した著作であり、東アジアにおける「終戦記念日」をめぐる研究への方法論として極めて参考になるものである。韓国における「八月十五日解放」は日本における「八月十五日終戦」、ひいては東アジアの戦後観にどのようにつながるのか、今後の研究が望まれる。

思想』二〇一三年第三号、二七五六頁。ただし、小林によれば、韓国（南朝鮮）における日本からの解放を祝う「八月一五日」イベントは一九四六年初期からその動きがあったようである。特に一九四六年七月二六日に、韓国を統治していた米軍政は八月一五日を対日勝戦とした上で、米朝共同の祝祭日として据えることを表明したようである。

(1)『朝鮮日報』二〇〇七年八月一一日―一二日
(2)『東亜日報』二〇〇七年八月一〇日
(3)『中央日報』二〇〇七年八月一〇日
(4)『ハンギョレ』二〇〇七年八月一〇日
(5)『国民日報』二〇〇七年八月一一日
(6)『文化日報』二〇〇七年八月一〇日
(7)『釜山日報』二〇〇七年八月一一日
(8) 고바야시 소메이（小林聡明）「남북한에서의 기억의 관리와 〈역사〉의 창조-해방에서 1950년대까지의 〈8・15〉이벤트를 중심으로」『日本